



ウメ

61編は **ダビデの詩、賛歌** です。詩人は私の祈りに耳を傾けてくださいと、神に叫び声をあげて、祈っています。

心が挫けるとき／地の果てからあなたを呼びます。(61:3)

詩人は自分が居るところを「地の果て」と感じているのです。地の果てにいるということは、孤独であり、弱り、頼りにするものがなく、見捨てられている思いでいるということでしょう。こういう状況であれば、だれでも心が挫けます。絶望的な思いになるでしょう。しかし、詩人はそんな時こそ、神を求めずにはいられないのです。

高くそびえる岩山の上に／わたしを導いてください。あなたは常にわたしの避けどころ／敵に対する力強い塔となってくださいます(61:3)

詩人は高く、確かな所におられる神のもとに行きたい、神のもとこそ詩人の砦、避けどころと言います。**あなたの幕屋にわたしはとこしえに宿り／あなたの翼を避けどころとして隠れます。(61:5)**

詩人は神の翼の下に永遠に隠れたいと願います。「隠れる」という言葉には「潜む、消える」の消極的な意味合いも感じられますが、聖書では違う意味を示しています。ダビデが命の安全を求めて、あちこちで隠れた洞穴を思い起させます。隠れて敵を避け、そこで憩い、守られたことを感謝し、力を蓄えることができた場所です。神のもとに隠れる時にこそ、力を与えられ、次にすべきことに向い合えると信じます。

神よ、あなたは必ずわたしの誓願を聞き取り／御名を畏れる人に／継ぐべきものをお与えになります(61:6)。

と、「継ぐべきもの」、即ち継承し、伝承し、子々孫々まで伝え続けるものを与えられると信じます。聖書の場合は、神への信仰が継ぐべきものです。イスラエルの民を導く者は神の言葉を預かる預言者でした。けれども他民族の脅威から民の安全を守るため、軍を指揮、統率する大将として王を求めようになりました。サムエルは民の要求を呑んで仕方なくサウルを王に立てました。サウル亡き後、ダビデが王に選ばれましたが、ダビデはサムエルの教えを堅く守り、**神の前であって、信仰第一とする王となろうと努めたのです。王が神の前であってとこしえの王座につき／慈しみとまことに守られますように。わたしは永遠にあなたの御名をほめ歌い／日ごとに満願の献げ物をささげます。(61:8)** 王は、民を守るために厳しい戦いを率いて、勝利を目指して進まなければなりません。王の不安と孤独、唯一の信頼が神であるとの信仰告白、王の気概と決意がこの61編に歌われています。

『讚美歌21』は61編をパキスタン民謡による讚美歌508「救い主イエスこそは」と関連づけています。「サレナム(避けどころ)」を繰り返して歌います。<https://www.youtube.com/watch?v=r50pMKhtlpw> ジュネーブ詩編歌は古楽器ビオラ・ダ・ガンバとリュートの合奏で、慰め深い演奏をしています。

[Psalm 61 Genevan Psalter - setting by Claude Goudimel lute & viols - YouTube](#)